
母は自動人形

白藤 凜音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

母は自動人形

【Nコード】

N5944F

【作者名】

白藤 凜音

【あらすじ】

時は二十二世紀。かつて児童虐待が問題になった日本では、自動人形が開発され、今や家族と呼ばれる存在にまでなっていた。自動人形を母に持った少年の物語。

人間と自動人形

人間は自動人形オートマタを造り、愛して、密接な関係にまでなった。けれど、愛し合う事までは叶わないんだ。それは、自動人形が自動人形であるが故……。

ここは二十二世紀の日本。

最先端の科学技術を持つこの国には、もう解決出来ない問題はな
いかのよう。

その代表と言えるのが、ここ五十年の間に急速に改良された自動
人形。

僕達人間と自動人形は、寄り添うように生活している。

彼女達は人形ではなく、人間と同様の扱いをされている僕達の家
族だ。

子孫を遺す事は出来ないけれど、人間と自動人形の婚姻が許され
る程に、身近な存在。

彼女達を 家政婦 と見なす人もいる。自動人形は家事を含め、
人間が生活する上で必要な事が全てインプットされているため、付
き合い方によっては間違いとも言い切れない。

そして彼女達がそう言われてしまう決定的な所因があった。それ
は。

「お帰りなさいませ、ご主人様」

玄関を開けると彼女は跪き、機械的な声で僕を出迎える。
僕が中学校から帰る時間を知っているから出来る事だけど、フランス人形のような長い金髪とサファイアを思わせる蒼い瞳が哀しい。そう、人間と自動人形の最大の違い。それは、自動人形は人間に 仕える ように 造られて いる事。
どんなに両者が密接な関係になろうと、これだけは変わらない。

「ご主人様、お食事が出来ております」

感情を含まないその声は、僕の心を冷たく突き刺す。たとえ、彼女に悪気がないと分かっていたても。

「うん、いつもありがとう……お母さん」

精一杯の感謝の気持ちを伝える。それが、お母さんに伝わっているかは分からないけれど。

「全てはご主人様の為でございます」

その言葉を聞きながら、僕はリビングの定位置に座り、出来立ての食事に手を伸ばす。

傍目から見れば、彼女はよく出来た自動人形だ。

けれど僕が欲しいのは、絶対的な忠誠なんかじゃない。

お父さんが、お母さんに注ぐような 愛情が欲しいんだ。

僕はお父さんとお母さんの本当の子供ではない。

孤児院にいた僕を、妻が自動人形であるが故に、子供を作れないお父さんが引き取ってくれたんだ。

お父さんは仕事がとても忙しくて、一年のうちに片手で数えられるくらいしか会えないけれど、僕を愛してくれる。けれどお母さんは……。

「ご主人様、どうしたのですか？ お食事が冷めてしまいます」

お母さんの冷たい声で現実呼び戻される。

感情の起伏がない自動人形にも、表情はある。だけどそれは、唯一人の相手　お母さんだったらお父さんだけに向けられるよう、精巧に造られているから、お母さんの笑顔が僕に向けられる事はない。

ゆっくりとスープを口に運ぶと、長い時間僕は惚けていたのだろう。既に温くなっていた。

それを飲みながら僕は思いを馳せる。二十一世紀、彼女達が生まれた悲しい理由に　。

自動人形が生まれた理由

いつか歴史の授業で習った、僕が生まれる少し前の話。

二十一世紀 虐待や育児放棄が溢れた、悲しい時代。

その子供が成長し研究を重ねた結果、自動人形は生まれた、と…。

二十一世紀。いつか歴史の授業で習ったその時代は、混沌としていたらしい。

戦争を放棄して平和になったというのは、あくまでも表面上の話。実際は戦争こそないけれど、親が子を殺す事がある時代だったと聞いている。そしてまたその逆も。

そして、殺しはしないものの幼い子供の事を放置したり、暴力を振るう親も後を絶たなかったとか。

勿論、子供に愛情を注ぎ一人前に育てた親も数多くいたと思う。しかしそれは社会の中では当然の事と見なされ、目立つのは悪行ばかり。歴史とはそのようなものだろうと、僕は思っている。

そして、二十一世紀の虐待が歴史に残った理由は、ただ数が多かったからではない。虐待を受けた子供が成長し、自動人形を開発したからなんだ。

自動人形は、これまた二十一世紀に流行したメイド というものを参考にしているらしい。

それは主人にひたすら従順な、とても可愛らしい女性だと言われている。

確かに自動人形の容姿は例外なく美しく、服装も黒を基調とした

ふんわりとした膝上丈のドレスに、白のレースやリボンをあしらったものが多い。

加えて白いエプロンをつけ、ニーソックスやドレスと同色の可愛い靴、というのが彼女達の基本的な服装で、それはメイドと驚く程酷似していたんだ。

僕はそこに、自動人形を開発した者の理想を垣間見た気がした。決して己に逆らう事がない、従順な女性。

けれどそのような女性を現実に探し出す事は困難を極め、何より人間はいつ豹変するか分からない。

実際に親から虐待を受けていたのならば、そう考えてしまうのも仕方がない事だと思う。

それならば、造ってしまえばいいではないか　という結論に達する気持ちも、分からなくはない。

無論、開発するにあたって、僕には想像もつかない程の苦労や努力があつたのだろう。それを為し遂げた事に対しては、心の底から敬意を表する。

自動人形には家事、育児等、基本的に母親が勤めるであろう仕事の能力が搭載された。それ故、彼女達と人生を共にする成人男性も増え、民法により自動人形との婚姻も許可される。

それは結果として子供を作れない夫婦を増やしたが、それ故に救われる孤児も増えた。人間と自動人形の夫婦は、決して子供が要らないから結婚する訳ではないようで、養子を引き取るケースが多かったようなんだ。

そう。孤児や虐待された子供の受け皿が社会的に整ったから、僕も今こうして平和に暮らしている。

歴史上描かれてはおらず、今となっては知る術もないけれど、自動人形を開発した者の真の狙いは、恵まれない子供達を救う事だったのかもしれない……。

現代科学の限界

科学の力は、人間の理想は、真に人間を救えますか？

いつの日か、自動人形に心を埋め込む　僕はそんな科学者になりたい。

食事が終わるとお母さんは食器を片付けてくれる。
僕だってそれくらい自分で出来るのにお母さんは、

「これが私の勤めでございますから」

いつだってこの一点張り。

そこが自動人形らしいといえばらしいのかもしれないけど……。
キッチンから、スポンジが食器を擦る音が聞こえてくる。キュッキュツ、というそれがとても心地良い。

規則的に聞こえていた音が止むと、今度は食器を洗い流す水音が聞こえてくる。

どこの家庭にもあるであろうこの時間が、僕は何よりも好きだった。

それには、僕が孤児であったという事も、お母さんが自動人形であるという事も、忘れさせる穏やかさがある。

全ての音が止まった時、僕は意を決してお母さんに声を掛けた。

「お母さん、僕の名前を呼んで」

何度願ひ、叶わなかったか分からないこの想ひ。恐らく今日も叶

わないであろう事を分かっているながらも、僕は口にせずにはいられないんだ。

お母さんはゆっくりと振り返り僕を見ると、静かに口を開いた。

ああ、この口の形は。

「畏まりました、ご主人様」

やっぱり 分かっていたけど、僕は思わず頂垂れた。

従順だけど感情の起伏がなく、唯一人の相手にしか表情を見せない、自動人形の性に。

そして……僕の名前が、未だにインプットされていない事に。

「お母さん、僕は科学者になるよ」

僕にはさっきのお母さんの言葉を、初めて放たれた日から、抱いていた夢がある。

「さようでございますか」

サファイアを思わせる蒼い瞳は冷たいままで、声も相変わらず機械的。だけど、それでもいいんだ。

いつか僕がその瞳と声に、温もりを与えるから。

僕の夢 それは、自動人形を開発した者を越える科学者になり、彼女達に心を与える事。

現代科学ではそれは未だ不可能。けれど科学は日々進歩している。その事はもしかすると彼の者の意にはそわないかもしれないし、必ずしも成功するとも限らない。

けれど時代は確実に変わって来ている。二十一世紀でなら失敗したであろう事も、二十二世紀である今、そして今より先の未来では成功するかもしれない、そう僕は信じている。

「お母さん、いつかきつと、心をあげるからね」
「畏まりました、ご主人様」

返ってくるのはいつも通りの言葉。今のお母さんには、きつと僕の想いは理解されていないだろう。

科学で心を作る　それこそ禁忌であり、非科学的だと非難を受けるであろう事は、容易に想像がつく。

けれど限界に挑戦して、いつの日かその想いが叶うなら。また、僕と同じような境遇の子供達の願いが叶うなら。

僕にとって、それ以上幸せな事はないんだ　。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5944f/>

母は自動人形

2010年10月8日23時37分発行